会話文から消える句点と作品の読み方
―太宰治『人間失格』の出版史と補助符号の変遷について―

小田桐ジェイク
筑波学院大学

1、はじめに――本発表の概要と目的

よく知られているように、日本語の文章はさまざまな要素から成り立っているが、その一つの重要な役割を果たすのは句読点及び符号である。句読点というのは、文章の中に打たれる「、」が読点で、文章の最後に打たれる「。」が句点と呼ばれる。他に、疑問符「?」や感嘆符「!」や(六点)リーダー「……」がしばしば日本語の文章に出てくる。もちろん、これ以外に括弧類「「」『』〈〉〈〉」や中点「・」やダッシュ「――」などの補助符号も見受けられるが、これらの記号は文章の読み方と深い関係がある。従来の研究においては、特に句読点が取り上げられ、文章での機能が考察されている。

本発表では、太宰治の代表作『人間失格』(『展望』一九四八・六～八)における会話文を取り上げ、特に文末に打たれている句読点を考え直したい。先に、日本語の文章、主に文藝作品における句読点に関する従来の研究を確認しておく必要がある。その結果を踏まえた上で、日本近代文学の代表作家(文豪)の作品を取り上げ、会話文末記号(句読点等)とその傾向を確認していく。そして、太宰の作品全体を取り上げ、時期的代表作の場合を確認した上で、『人間失格』の会話文末における句読点の有り様を論考していく。

2、文藝作品と句読点・句読法・符号(記号)に関する研究史

日本語の文章における句読点及びその使用法である句読法に関する研究は非常に多く、簡単にまとめることが困難である。そこで、岩崎拓也(二〇二三)の調査ではおよそ一〇〇年の研究を取り上げ、従来の句読点(句読法)に関する研究を見事にまとめている。その結果としては、次のように指摘している。

【先行研究1】岩崎拓也『現代日本語における句読点の研究――研究概観と使用傾向の定量的分析』(ココ出版、二〇二三)

(前略)さまざまな研究者によるさまざまな指摘が行われているが、各論文の主張は、句読点が合理的に扱えるものであるかどうかによって異なると言える。句読点を合理的に扱う立場では、文法的視点から句読点を説明しているものが多い。具体的に、文構造によって(係助詞、連用中止、従属節(接続助詞)などの直後に)読点が打たれるとするものであると捉えている。一方、句読点の表れは書き方によって、また文によって異なると捉えている。具体的には、リズムの問題や書き手が主張したい気持ち、さまざまな要因が複雑に絡み合っているとまとめるものが多い。さらに、これらの折衷案的な考えとして、句読点は基本的に文構造によって打たれるが、打つかどうかは書き手次第で、その句読点の表れは一概には説明することが難しいとするものが存在する。

実際に確認してみると、従来の研究のほとんどは岩崎論にある指摘の通りである。文構造と品詞

との関係で句読点の有り様を考察する論が多く存在している。そして、文藝作品のようなものにおける文構造は、「書き手の気持ち」を明らかにしようとするものが多い。更に、文藝作品における句読点(句読法)を中心に研究史を確認すると、研究の論文本数が少ないというわけではない。ここで全てを紹介しないが、本発表と直接関係のあるものを取り上げてゆく。

まずは、一九五七年に発表された、「文芸作品にあらわれた句読法の諸問題」という論文の論調を見てみたい。社会とテクノロジーの変化を踏まえた上で、次のような指摘が見える。

【先行研究2】宮地裕「文芸作品にあらわれた句読法の諸問題」(『ことばの教育』、一九五七・二)

文芸作品の句読法も、作品そのものの内的成長と無関係ではない。句読法は二重性格を持つことはたしかであるけれども、いずれかといえば、意味の切れつづきが、息の切れつづきよりも、先行するのであり、その点で、現代語の論理化と緊密な関係を持つのである。(中略)現代作家の、どれほどおおくが、句読法に対して、関心と自覚を持つものか、はなはだ疑わしいところである。

ここで、文藝作品と他の文章の論理性が問われていることが注目すべきところである。特に、戦後の教育においては、文章の論理性が議論され、句読点の使用法(句読法)がしばしば取り上げられていることがうかがえる。

この後も、日本近代文学の中に出現する句読点に関する研究が次々と出てくる。例えば大橋禄郎「小説での補助符号」(『言語生活』一九六二)では次のような指摘がある。

【先行研究3】大橋禄郎「小説での補助符号」(『言語生活』一九六二)

句読点は、補助符号のうちでも使用頻度がもっとも高く、一般的な符号といえます。ところが、その符号の用法となると、人によりさまざまで、一定の用法を定めることは現在では不可能とされています。日本の文章の構成上、いま以上の妥当性は望めないと考える人もいます。

一般的な指摘ではあるが、同時に筆者によって句読点の使用法、つまり句読法は異なっているということが非常に重要な指摘になっていると考えられる。また、岡崎晃一「芥川龍之介の文体の基礎的研究—小説における接続詞のあとの読点—」(『解釈』22、一九七六)では、芥川の文体が中心であるのに対し、次のような指摘がある。

【先行研究4】岡崎晃一「芥川龍之介の文体の基礎的研究—小説における接続詞のあとの読点—」(『解釈』22、一九七六)

句読点は本来修辞的なものである。修辞的なものは、もともと作家がみずから意図する文学的効果を読者に与え、読者を自己の予定する文学的境地に誘導するための技法であると言えよう。従ってそれは、作家の、句読点の修辞的技法に対する理解と能力とによって、個性的区別を伴うはずのものである。句読法は、比喩的に言えば、バック・グラウンド・ミュージックのような、底辺的な語学的文体の一つと言える、と考えられる。

文章における句読点は「修辞的なもの」であり、「バック・グラウンド・ミュージック」であるという考え方は、つまり、読者は句読点の打たれ方をほとんど意識せずにすらすらと文章を読むことになるとも言える。このようなスタンスは、また片村恒雄「文学教材の句読法―『羅生門』の場合―」(『表現研究』52、一九九〇・九)において、次のような指摘がある。

【先行研究5】片村恒雄「文学教材の句読法―『羅生門』の場合―」(『表現研究』52、一九九〇・九)

句読点は、通常は、作品を読んでも、それほど注意を向けることのないものである。

句読点のうち、特に読点は、センテンスの中での、語句の切れ続きや修飾・被修飾の関係等を明らかに示すことによって、文構成を明確にするうえで重要な働きをしている。しかし、その読点が、作品の内容の表現の仕方や、作者の作品を創作していく時の創作心理と深い係わりを持つことについては、あまり注意が向けられていない。

しかし、後に見るように、文藝作品における句読点は、むしろ、読書という行為に大きな影響を与えているはずであることになる。

また別の角度からは、岡崎洋三『日本語とテンの打ち方』(晩聲社、一九八八)によると、次の指摘がある。

【先行研究6】岡崎洋三『日本語とテンの打ち方』(晩聲社、一九八八)

テンの打ち方を決めるもうひとつの変数は、「何」を書くかということだ。小説を書くのか、論文を書くのか、それともエッセイを書くのか、あるいは自分史なのかというジャンルの問題がある。そして、小説を書くといっても赤川次郎氏や渡辺淳一氏のようなものを書いて流行作家になりたいのか、芸術性の高い作品を書こうというのかも「変数」のひとつであろう。(中略)ジャンルによってテンの重要度は異なってくる。

先述した通り、文藝作品は学術論文とは同じような句読点を使っているはずがない、ということになり、文章のいわゆるジャンルと深い関係がある。これが更にユニアルシー「日本語条件表現における句読点の打ち方――文学作品を例として」(『日本語文化研究会論集』二〇一二)によると、次のように指摘されている。

【先行研究7】ユニアルシー「日本語条件表現における句読点の打ち方――文学作品を例として」(『日本語文化研究会論集』二〇一二)

句読点の打ち方は作家や作品によって違いはあるが、一般的には小林(2004)が述べた通り、条件表現「ト・バ・タラ・ナラ」のあとには、基本的には読点が打たれる傾向にあることがわかった。ただし、佐竹(1990)が読点を打つ場合については「限定を加えたり、条件や理由をあげたりする読句のあと」と述べているにもかかわらず、今回の調査からも条件表現のあとに必ず読点を打つとは限らず、しかも、「この文型にはかならず読点を打たれる」と決めることはできないことがわかった。

ここでも、句読点の打ち方は作家による、という結論が見える。

他にも、例えば坂井晶子「文学と記号表現―近代文体成立と句読法との関連性について―」(『表現文化』6、二〇一一・一一)という論文の中では、二葉亭四迷『浮雲』を中心に、断続的に書かれたことを踏まえ、その間に二葉亭四迷が翻訳作業に取り組んでいたことが、後の創作に影響を与えたことが論じられている。このような論調には妥当性があり、日本語の文法や句読点などの変遷を更に考える必要があると考えられる。

3、日本近代文藝作品における句読点・符号と会話文

これまで取り上げた研究は、いずれも文章における句読点の使い方、つまり文章構造と品詞(例、接続詞、係助詞等)と句読点との関係が取り上げられた。しかし、会話文の最後に打たれる句点「。」に関する考察はない。これはなぜだろうか。この疑問に関する答えはまだ明確ではないが、調査した範囲で、現代の作家の多くは鉤括弧つきの会話文の最後に句点「。」を打たない傾向が強いからであることが分かる(祖父江慎「セリフと句点」『祖父江慎+コズフィッシュ』パイインターナショナル、二〇一六)。

【参照資料1】祖父江慎「セリフと句点」『祖父江慎+コズフィッシュ』パイインターナショナル、二〇一六)

どうも腑に落ちないことがある。

今も小学校では会話文の終わりに句点(。=マル)をつけ、その後に閉じカギ(」)を付けるといふ指導をしている。でも、(。」)で原稿を書いている作家って、よしもとばななさんくらいしか思い浮かばない。

マンガの場合、会話文はふきだしの中にある。現在ふきだし文の最後に句点をつけているのは、小学館だけなので、そこを見れば出版社もわかっちゃう(小学館の少女マンガ雑誌「ちゃお」だけは、句点が付けていない)。

また、小学校では、会話文の途中で改行のときは、一文字を下げて表記するように指導しているけど、本屋で出会えるそんな組み方の本って「かいつけゾロリ」シリーズ(ポプラ社)と、『ベリーショーツ』(よしもとばなな、二〇〇六)くらいかも。

拗促音の小書き文字位置(略)についても小学校での指導表記と現実とは違ってる。学校で教えてもらう表記法と、世間一般の表記法。分ける必要ってあまりなさそうだ。

でも、どっちもありな状態って、表現法が豊かで嬉しい。

【参照資料2】「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)」(一九四六)

呼び名(1) マル

符号 。

準則

一、マルは文の終止にうつ。

正序(例1)倒置(例2)術序省略(例3)など、その他、すべての文のの終止にうつ。

二、「」(カギ)の中でも文の終止にはうつ(例4)。

三、引用後にはうたない(例5)。

四、引用後の内容が文の形式をなしてゐても簡単なものにはうたない(例6)。

五、文の終止で、カッコをへだてゝうつことがある(例7)。

六、附記的な一節を全部カッコでかこむ場合には、もちろんその中にマルが入る(例8)。

【参照資料3】『文部省刊行物表記の基準』(一九五〇)

5 「 」『 』かぎ

1 「。」は、一つの文を完全に言い切ったところに必ず用いる。

「 」および( )の中でも、文の終止には「。」を用いる。

「……すること・もの・者・とき・場合」などで終る項目の列記にも「。」も用いる。

しかし、歴史的に見ると、そのような傾向は比較的新しい現象であることもうかがえる。戦後すぐに、文部省教科書局国語調査室が発行した「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)」(一九四六)及び『文部省刊行物表記の基準』という資料には、鉤括弧「 」の最後に句点「。」を打つべきであるという指導が見える。現在、これが日本の学校の作文指導にも応用されているはずであるのに対し、文藝作品の多くから消えてしまったことが分かった。

そうであるならば、日本近代文学の作品はどうなっているのだろうか。本研究では、太宰治と同時期に活動した作家、またいわゆる太宰の「先輩」に当たる先行作家の作品を数多く調査した。**【資料4】**夏目漱石をはじめ、谷崎潤一郎、森鷗外、芥川龍之介、志賀直哉、川端康成、横光利一、林芙美子、坂口安吾、高見順、武田麟太郎、織田作之助、石川淳、田中英光という十五人が調査対象となった。また、調査した作品群は、作家の生前に刊行されたものに絞った。その理由は、よほどの例外を除いて、作品(集)が刊行される前に、作家の目を通すことがあるからである。その結果は、まず、「会話」というものは必ずしも鉤括弧つきという形ではないこと、そして、それぞれの作家の作品における形式が大きく異なっている。例えば、夏目漱石の作品における会話文は、手書き原稿も確認できたことで、最後に句点「。」が打たれていない。それに対し、芥川龍之介の刊行された作品及び手書き原稿における会話文はいずれも句点「。」で終止していないことがうかがえる。あるいは、志賀直哉の作品には句読点以外の符合が多くなるのに、会話文の最後に句点「。」は打たれない。例外を除いて、調査した範囲で分かったことは、織田作之助以外の作家の作品における会話文の最後に「。」の有無がほぼ決まっていることが分かった。更に、高見順の作品の多くには、そもそも鉤括弧つきの会話が使用されないだけではなく、「おビール?――女が下で言った」という比較的独特な形式になっている。いずれにしても、各作家の作品のほとんどは統一していることが重要な点であることをここで指摘したい。

4、太宰治『人間失格』作中世界と会話文

更には、太宰の作品を確認してみると、興味深い傾向がうかがえる。しばしば、太宰が活動した時期を「前期」「中期」「後期」という三つに分けられるので、各時期の代表作品における会話文を調査してみた**【資料5】**。対象となったのは『逆行』と『道化の華』(前期)、『富嶽百景』と『火の鳥』(中期前半)及び『津軽』と『竹青』(中期後半)、『斜陽』と『人間失格』(後期)である。多くの作品から実例を取り上げると、これまで論じてきたように、それぞれの作品における会話文の形式が異なってくる。例えば、**【資料6】**『逆行』の場合は、鉤括弧は使用されず、ダッシュ「――」という記号で会話文が示されている。あるいは、**【資料7】**『富嶽百景』や『火の鳥』などは、会話文を鉤括弧に入れているのに対し、地の文が混在していることが多くある。だが、**【資料8】**『斜陽』や『人間失格』の場合だと、会話文と地の文は明らかに分けられている形式ということがうかがえる。結果的に、

同一作家の作品を多く並べてみても、それぞれの作品における会話文の形式が異なっているということが分かる。ただ、それだけではなく、従来の研究にしない問題としては、各々の作品の作風や物語、語り、語り手、展開、登場人物の性格等々の多くの事柄があるので、会話の形式が異なってくることは、当然である。

5、鉤括弧内から消える句点「。」とその意味

その一つの重要な点は、人物同士の関係である。『人間失格』を見ると、「第二の手記」の後半に、主人公「葉蔵」は「ツネ子」と心中を図り、彼女は死に、彼は生き残るという展開で、「葉蔵」は警察に質問されたりすることがある。次の引用はその一部である。

【本文1】太宰治『人間失格』「第二の手記」後半部

深夜、保護室の隣りの宿直室で、寝ずの番をしてゐた年寄りのお巡りが、間のドアをそつとあけ、

「おい！」

と自分に声をかけ、

「寒いだらう。こつちへきて、あたれ。」

と言ひました。

自分は、わざとしほしほと宿直室にはひつて行き、椅子に腰かけて火鉢にあたりました。

「やはり、死んだ女が恋ひしいだらう。」

「はい。」

ことさらに、消え入るやうな細い声で、返事しました。

「そこが、やはり人情といふものだ。」

彼は次第に、大きく構へて来ました。

「はじめ、女と関係を結んだのは、どこだ。」

この会話の前後をここで紹介しないが、文体だけを中心に見ても、「葉蔵」と「年寄りのお巡り」との関係が読み取れる。敬語などのようなことだけではなく、会話文の最後に打たれる符号、特に句点「。」の使い方からは、二人の関係が読み取れる。注目すべき点の一つは、句点「。」で発言が終止されているのに、命令や疑問や断言といったさまざまな類が混在している。例えば、「あたれ。」という命令や、「どこだ。」という疑問がある。また、「葉蔵」の単純な返答には「はい。」とあるように、緊張感がこの場面にあることが読み取れる。

このような会話文の最後に句点「。」が打たれていることは、初版本や初出雑誌だけではなく、手書き原稿まで遡ると確認することができる。ここで作家の意図を論じようとしているわけではないが、『人間失格』のあるべき姿というようなものが存在していることを意識しなければならない。しかし、ここで引用した形としての会話文は、現在の新潮文庫や角川文庫や集英社文庫などの媒体から消えてしまっている。つまり、疑問符「？」と感嘆符「！」とリーダー「……」が残されているのに対し、会話文の最後から、原資料にもあった句点「。」が削除されている。

しかし、調査してみると、一九五二年に刊行された新潮文庫版『人間失格』、つまりその媒体の初版本には、会話文の最後に打たれる句点「。」は原資料と同じ形式になっている。いつその形式が変更(更新？)されたのかはまだ調査中のところであるが、ここで問い直したいのは、会話文の最

後に打たれていた句点「。」が消えてしまうことで、作品の読み方が変わるのだろう。

これまで見てきたように、会話文それ自体は登場人物の性格(少なくとも、見せようとしている性格)と深い関係があることが分かった。したがって、句読点は文末記号が表現の一部となり、その有無は発話者の性格を変えることになる。先ほどの「葉蔵」と警察との会話の文末に打たれている句点「。」を削除することで、断言やそれにおける緊張感も削除され、結果としては発話者の性格も別の角度で読まれることになる。もちろん、これまで一つの場面だけを見てきたが、ほかの会話にもの同じようなことを見出すことができる。

6、おわりに――本発表のまとめと今後の課題

本発表では、文藝作品と句読点の関係、特に会話文末の記号について考えてきた。日本語の文章における句読点や符号などの記号に関する先行研究が非常に多いので、それを確認するだけで発表の前半がそれを中心となった。しかし、発表の後半に、日本近代文学の作品における会話文末に打つ・打たない句読点などの記号について考察した。結果としては、作家による、となるが、更に調べてみると、出版社側においても会話文末の記号を変えることもある。本発表では、太宰治の代表作『人間失格』を見てきたように、手書き原稿や初出雑誌、それから初版本には会話文末に何かしらの句読点のような記号がある。しかし、新潮文庫をはじめ、多くの出版社は会話文末に打たれていた句読点を削除しているので、登場人物の性格を変えてしまうこともあるのではないかと考えられ、すると作品の読み方にも影響を与えることがあると言えよう。

今後の課題としては、近代文藝作品における会話文末に打たれていた句点等などの記号の変遷を更に確認していきたい。仮に、出版社からの情報がなくても、傾向等を確認することで、いつから、また何のために原文(原資料)を変えているのかを考え直すことができる。また、第5節で取り上げた本文を増やし、登場人物の性格や作品の読み方などをより詳細に見ておきたい。特に、作中世界と登場人物の相互関係が会話文だけではなく、その会話文末にある句読点などの記号の意味を明らかにしたい。更に、句読点だけではなく、他の符号の意味も考え直す必要があると思い、会話文においては「。」「、」以外に、「!」や「?」や「……」や「――」などが散見されるので、場合によっては句読点と同じような機能を果たし、場合によっては別の意味を持つこともある。よって、作中世界と登場人物の会話文とそれにおける文体と深い関係のある句読点・記号の意味をより深く考えていきたい。